

議員派遣報告書

立川市議会副議長
高口 靖彦

- 1 期 日：令和4年10月13日（木）・14日（金）
- 2 会議名：第84回全国都市問題会議
- 3 派遣先：長崎県長崎市出島メッセ長崎
- 4 派遣者：
たちかわ自民党・安進会：木原宏（議長）・江口元気・松本あきひろ・高畠奈美
公明党：高口靖彦（副議長）・伊藤幸秀・福島正美・山本みちよ
立憲ネット緑たちかわ：わたなべ忠司
国民民主党：大石ふみお
都民ファーストの会立川市議会：いしとびかおり
- 5 テーマ：個性を活かして『選ばれる』まちづくり
～何度も訪れたい場所になるために～

6 内容報告

10月13日、長崎市・出島メッセ長崎で、全国市長会等4団体主催の「第84回全国都市問題会議」が開催されました。

3年振りの開催です。全国から、市長・議員等約2千人が参加されました。

開会式で、全国市長会会長の立谷秀清相馬市長、開催市田上富久長崎市長、来賓祝辞として大石賢長崎県知事（代理）よりご挨拶がありました。

はじめに、「民間主導の地域創生の重要性」と題して、株式会社ジャパネットホールディングス代表取締役社長の高田旭人氏が、基調講演をされました。

ジャパネットは、36年前に長崎の小さなカメラ店としてスタートされました。創業者の高田明氏は、新しいショッピングの形を生み、通販事業を確立されています。そして今日まで、創業者の”見つける”、“磨く”、“伝える”、の方針を受け継がれています。

高田氏は、人口減少が続く地域にあって、“長崎を盛り上げたい”との強い意識

の中、行政と違って、“公平性”に左右されない民間企業だからこそできる思い切った地域創生事業、“長崎スタジアムシティプロジェクト”に着手、2024年開業を目指されています。

スタジアム（サッカー）、アリーナ（バスケットボール）、オフィス、ショッピングモール、ホテル等を一堂に有する一大プロジェクトです。2017年よりJ2プロサッカークラブ「V・ファーレン長崎」の運営、2020年にはプロバスケットボール「長崎ヴェルカ」を立ち上げ運営されています。

このプロジェクトで実行する様々なアイデアを照会されました。

- 荷物の持ち込みを禁止、ロッカールームを多く配置
- 試合後の出庫時間に応じて、駐車料金を変更
- 年間シート購入者には、高速WI-FIの提供
- スタジアムVIPルームは、試合が無い日はスタジアムを臨めるホテルとして活用
- 専用ビルをつくり、車の交通量を減らす
- 語学とスポーツを両方学べるスクールを開設
- 長崎大学院を誘致 等々

社内の働き方改革についても、話されました。その方のパフォーマンスが上がる、とやってやっているとのことです。

週3回のノー残業デーで18時半に帰社。スーパーリフレッシュ休暇で連続16日間の休暇取得。断捨離の決行で、帰宅時に机の上には何も無い状態。12時から14時まで、会議の中止。子育て支援として、卵子凍結費用の補助（最大40万円補助）などなど。

最後に高田氏は、ゆくゆくは、長崎で地域創生の成功モデルをつくり、日本全国への発展へ貢献できることを目指したいと、話されました。また行政に期待することとして、民間企業のみではできないことの協力で、ともに「地域を活性化させる」という同じゴールの絵をもって、理想の地域創生、地域全体の幸福の総量を増やしていきたい旨、熱く語られました。

夢と希望溢れる壮大なプロジェクトです。クリエイティブプロデューサーを務められる福山雅治氏のCMムービーも素晴らしかったです。

次に、「長崎の魅力あるまちづくり」と題して、田上富久長崎市長より、主報告がありました。

人口減少、人口密度減少時代の長崎市にあって、「昭和の観光都市」から「選ばれる21世紀の交流都市」を目指し、“価値を見つける”、“価値に気づく”、“価値を磨く”、“価値を生み出す”の4つの視点から取り組まれていることを報告されました。

“価値を見つける”では、日常生活の1ページでしかなかった端島炭鉱(軍艦島)を見直して、「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼・造船・石炭産業」の構成資産として世界遺産に認定されたこと。

また、「DINOSAURIA」を恐竜と訳した長崎出身の考古学者横山又二郎氏や、長崎半島から国内で初めて10m級のティラノサウルス科の歯の化石が見つかったことなどから「長崎と恐竜」という新たな価値を見つけられ、2021年10月には「長崎市恐竜博物館」を作られています。

“価値に気付く”では、全国のまち歩き観光の先駆けとなった“長崎さるく”を紹介されました。さるくとは、“ぶらぶらあるく”という方言で、市内に散らばる魅力を見つけながら歩くものだそうです。

2006年4月から約半年間かけて行った「長崎さるく博」は、徹底的に自分たちの日常生活を紹介した“まち自慢”を行っています。最終的には、1万人近い市民の方が、ボランティアとなり、わが街ガイドを務められたそうです。このことが、自分たちのまちに新たな愛着がわき、シビックプライドの醸成にもつながっています。長崎さるくは、長崎のまち歩き観光として、今日の大きな観光資産の一つとなっています。

“価値を磨く”では、全国的にも殆ど例が無い“景観専門監制度”の導入を紹介されました。これは一般報告として、担当者が詳述されましたので、後述します。

“価値を生み出す”では、市民団体が取り組む、坂のまち長崎ならではの「さかのうえん」という取り組みを紹介されました。斜面地の老朽空き家除却後の跡地を、農園として有効活用するという観点から生まれたもので、ここを起点として多世代の交流や地域の活性化の取り組みが生まれています。地域課題が資源になるという発想の転換、これがキーワードです。

最後に、やはり「交流」が欠かせないとされ、そのまちに根づき、暮らす「土の人」と、そのまちを訪れる「風の人」が、ともにまちを感じ、交流することにより、普段見つけにくいそのまちの自然、文化、歴史などの新たな価値が見つかり、磨かれ、まちの価値が創られていくと、まとめられました。“土の人”と“風の人”との交わり、それが風土になっていくのでしょうか。

続いて一般報告の1番目として、「地域との新しい関わり方・関係人口」と題して、鳥取県立大学准教授の田中輝美氏より、報告されました。

関係人口という言葉は初めて聞きました。要約すれば「観光以上、定住未満」の第3の人口の考え方です。何度も人が訪れている幾つかの事例を挙げられました。

①もちがせ週末住人の家(鳥取市) 週末だけ住人になる、全国から大学生をはじめとした若いメンバーがいます。

このウェブサイトには、下記のようにあります。

「日本全体の人口のパイが減っていく中で、地方同士が人口を奪い合っても仕方ない。まちを面白くしていけるのは、まちにいつも住んでいる人だけではないはず。だからこそ「人口をシェアしよう」。そんな発想が、週末住人の活動の根底にあります。」 私は100%同意です。

②草刈応援隊（雲南市）主催 地元の“里親照らし隊”

③天空に駅（邑南町） INAKA イルミの運営

日本全体が恒常的な人口減少社会となり、多くの自治体が人口減少に直面しています。特に地方は、これまで警戒される存在だった外部のよそ者が、人口減少が進んだことで、逆に歓迎される存在となりました。

一方、首都圏（東京）生まれの首都圏（東京）育ちの若い世代が増えたことで、いわゆる“ふるさと”（帰省先）を持たない「ふるさと難民」が増えています。近所に顔見知りがない、愛着が持てない、、“ふるさと”に憧れるということでしょうか。この背景には、人とのつながり、自身の居場所、自身の存在意義の低下があると思います。

東京都の人口は約1300万人ですが、島根県の人口は約66万人。反対に言えば、東京の一人は1300万人分の1で、島根の一人は66万人分の1になります。一人一人の役割が大きくなり、1人の価値は、20倍以上になるものと思います。

こうして、需要と供給、両サイドの変化が、新しい存在としての関係人口を生み出しています。自身を暖かく受け入れてくれ、誰かの何かの役にたっているという実感は、お金や時間や汗を流したとしても、幸せなことと思います。

特徴として、3つのキーワードを紹介されました。

○名前が覚えられる規模（量より質）

○準備から片付け、打ち上げまで一緒に（脱・お客様は神様）

○住民の思いや背景も伝える（ストーリー化）

定住・移住にかかわらず、人口をシェアする関係人口は、人口減少時代にあつて、一時の切り札になると思います。その上で、人口減少を止めることを、試行し続けなければと思います。

2番目として、「ビジョンを活かしたまちづくり～『選ばれる山形市』を目指して～」と題して、山形市長の佐藤孝弘氏より、報告されました。

山形市が取り組む、「健康医療先進都市」、「文化創造都市」の2大ビジョンの積極的な施策展開について、話されました。山形市が“選ばれるまち”となるために、市として明確な将来ビジョンを定め、様々な政策をそれに結び付けて展開することが重要との考えからです。

健康では、私立病院をはじめとする総合病院が数多く立地し、人口1人当たりの診療所数も多いまちです。山形大学医学部においては、2021年2月から東北地方で初となる次世代型重粒子線がん治療が開始されるなど、最先端の医療を提供し、中核市移行後に市の保健所も設置されています。

文化では、令和4年に創立50周年を迎えたオーケストラ「山形交響楽団」を有していて、2021年の世界のオーケストラランキングで、日本で6位の成績に入る等の高い評価をされています。山形国際ドキュメンタリー映画祭は30年以上前に、市民の手作りによって誕生し、今やドキュメンタリー映画祭の中では、世界で確固たる地位を築かれています。

3番目として、『『交通の産業化』を支える～長崎市景観専門監の取り組み～』と題して、一般社団法人地域力創造デザインセンター代表理事の高尾忠志氏より、報告がありました。

田上長崎市長は、「ただ道路をつくるだけであれば1の価値なのが、少し工夫したり、何かをプラスすることで価値が10ぐらいになる。そして1年では気づかないかもしれないけれども、10年経つと、こうした個々のプロジェクトの集積でまちが大きく変化し、まち全体の価値が百、千のプラスになる」と、まちづくりに対するアプローチを語られています。このアプローチを実現するために、発案されたのが市役所内に景観の専門職を設置する「景観専門監」です。

高尾氏は、長崎市からの依頼により2013年度から、次長級の非常勤特別職として就かれ、公共事業のデザインの指導・管理、職員の人材育成をミッションとして、10年目を迎えられています。

平和公園の改修、鍋冠山公園展望台リニューアル、まちなか夜間景観整備、長崎駅舎・駅前広場等整備等、幾つかの具体的事例を挙げられ、これまでに100を超える事業を監修されています。

行政職員がともすると、狭い視野で目的達成に陥りがちな部分を、徹して現場と一緒に足を運び、実際に見て聞いて、より良いアイデアを引き出されています。元々職員は、真面目で優秀な方が多いので、少しの気づきで、新たなより良い案が出てくることに繋がります。

景観専門監は、職員の日々の業務に伴走する「家庭教師」のような存在と、言われました。担当者の提案に対して「問い」を投げかけ、より良い解を見つけ出すプロセスを生み出す「デザインディレクション」を行っているとのこと。当然、人材が育ってくるものと思います。

14日、昨日に引き続き2日目は、下記の方々によるパネルディスカッションが行われました。

コーディネーター	大杉覚	東京都立大学教授
パネリスト	野口智子	ゆとり研究所所長
	田中敦	山梨大学教授
	桐野耕一	NPO 法人長崎コンプラドール理事長
	都竹淳也	岐阜県飛騨市長
	藤原保幸	兵庫県伊丹市長

野口氏より、取り組まれていること、地域力創造アドバイザーとして雲仙市での「雲仙人プロジェクト」について、話されました。

同じ市の中で、けっこう目立つ活動をされているのに、お互いによくその活動や人となりを知らないことに、気付かれたそうです。人は妙に分断されていると。

職種や年齢、性別によっても縦割りにされていて、観光協会、商工会、JA、自治会、PTA等々、同じ人たちの中で、同じような繰り返しが起きています。

まず身近な人を知らなくては、人を人で磨こう、知っているようで知らないなら、「雲仙人」ネットワークを立ち上げ、人と人の繋がりを作られました。毎月のゆるい楽しいサロンの開催を、会場は会議室を使わず、何かを食べながら、同じような人が並んで座らずに、毎回様々なテーマで、全員が発言します。

このようなことを繰り返せば、自然と色々なことが起きてくるものと思います。

その後、田中氏から、“ワーケーションの意味の拡張と変異”について、桐野氏から、“まち歩きで見つけたまちの作り方”について、都竹氏から、“ファンとともに取り組むまちづくり”について、話されました。

飛騨市はアニメ映画「君の名は。」の聖地です。これをきっかけに、「飛騨市ファンクラブ」を設立され、様々な取り組みをされています。この取り組み内容は素晴らしいと思います。

以上、報告致します。



10月13日 全国都市問題会議の会場である出島メッセ長崎前にて